

学仏大悲心

「聞きに出たくないのが先で、理由は後からつきます。」とは、住吉の田中老の言であるが、けだしこれ、差別の愛憎のみに迷うて、平等大悲の教命を聞かぬ者、その者の腹の中をうがった言である。法が聞きたくないのは、心の胃腸が悪いからである。こうした人は、人間の経緯と見識だけで生きる。

人間の経緯にものを言わせてみ法を聞かない人、たとえ聞いても人間の経緯にものを言わせて、大法をそれに従わせるか、大法を立てて、まず大法にものを言はせて、人間の経緯を解消せしめるか、そこにまぎれない二つの世界がある。煩惱中心か念仏中心か。

人間の経緯が何であろうと、それよりもまず法を聞くべきである。平等大悲の教法は、心の滋養であると共に、心の胃腸を治する醍醐の妙薬である。み法を聞けば聞くだけ、心中に充滿するままに、いよいよ空腹を感じることである。平等大悲の教法のみ、醍醐の霊薬である。凡夫差別の心はすべて「智愚の毒」である。

大経には、傲慢と蔽と解怠の三つをあげて、真実教の信受されない因を示し、如来会には、邪見と下劣とをあげてある。傲慢と蔽と解怠と邪見と下劣の五つこそ、頑強に真実教に抵抗してこれを受入れまいとする難治の三病の具体相である。御正信偈に「邪見傲慢悪衆生 信樂受持甚以難」と示されてあるのは、五を略して二としてあげられたのである。

1

人は、その受けたる教え以外に人たるの人格的価値を發揮するものではない。しかして、如来平等大悲の真実教の言々句々より外に、我が心の真相を知らせて下さるものはない。故に、教えを聞かぬものは己を知らない、もし邪見傲慢がそのままであるならば、教えは一定のところより耳に入らない。教えが響いてきた時に、この己が心の病が見え、その時、教えが心に入る。教えはこの悪を融かして、教えに随順せしめる。であるから邪見傲慢を治療するものも正法であり、人格を長養するものも正法である。

正法に敏感なる心は、煩惱に対しては鈍感であり、煩惱に対して敏感なるものは、正法に対して鈍感である。

正法の世界では挺でこねても動かず、人の悪口などに対しては針でさされたことくらいで大騒動を起す。正法の言々句々は一一これを無視しても平気であり、隣近所の何でもない誤解などは傷にしむ塩ほど敏感である。これまさしく重病の相である。

正法に対して敏感であれ。羊の毛ほどの一言に対してすら、全我躍動して念仏する人、私は、この人のましますを知り、この人を今我が周囲に拝んでいる。

棒でたたいても動ぜぬ傲慢なる我。

若草がそよぐ風になびくが如く、静かに率直に正法のままに動く無我、正定聚の菩薩は、この正法のままなる世界に生れる。不退転に病の癒えつつある人である。

平等大悲の風、静かに渡るところ、そこには、徳の光、徳の香、徳の力が現われる。眞の歡喜と、明るさと、不滅の道がそこにある。

父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し等の諸善は、念仏体内の徳として、この正法の風そよぐ国に、念仏の大樹の枝葉として茂り、その万葉の花として咲くであろう。故にまず大悲を学んで念仏すべきである。

汝、汝の内心を唯一の問題とせよ。

汝、教主世尊、教主聖人の教法のみを唯一の問題とせよ。

誤つて、邪見傲慢を知らず、名利に執われ、一つの建物、一の権勢、等々に心を奪われて、世の雑音の機嫌をとり、煩惱邪悪の人と妥協して、その行歩を乱すことなかれ。必ず正法の園より追われ、他日の苦困敗退の種となるであろう。絶対に正法に忠実なる一道にあつてたじろがざれ。ものを煮るに、火をたきつけたその時すぐには沸騰せざるも、必ず、やがて煮えたぎるであろう如く、正法に忠実なるものは必ずその身栄えて、心安く、身豊かに、生きる日の幸を謝するの日あり。正法を聞きて、それに忠実なることは、釜の下に火をたいて、更に更に薪を加えるが如くである。

大法に忠実なることより外に汝に問題あることなし。ここに決定して動かざるものを最大一の智者となす。

世の愚者、火を釜の下に焚き、ただちに釜の中に手をつけて、未だ氷の如く冷たいのを見て、かえつて火を消す。人の汝を仰がないのは水の冷たきが為である。汝の冷たさを言うものがあらば、また更に三毒の水を出してかえつて世を怒り、これと争つて火を焚くを忘れ、法を求むるを止め、尊敬せざる者をにくみ、さらに、愚者あつて我を敬えばこれを迎える。自力の歩みはかくして乱れて六道に入る。

たとえ自力の習気ぬけきらずとも、正法を聞けば必ず利益あり。であるが故に、利益のぬるま湯に手をつつこんで、これに囚われて、火に薪を折り加えることを忘れるもの、億千万衆ごとごとく然りである。鸞師が「進むを知りて退くを守るを智と曰ふ」と釈せられたのも、智慧とは、菩薩が道によつて与えられる果報を私して、そこにとどまることなく、正法の命ずるままに、不退転に歩みを相続することを示されたのである。

不退転の聞法精進なくば、今は路傍に若干の安逸を恵まれて、貪欲の満足に安らかなるが如くなるも、やがて火消えて、道に落ち、秋風落莫の中に愚痴におわる日があるであろう。因果を顛倒して破句の子となるなかれ。大悲平等の教えのみに満足せよ。

静かなるもよく、静かならざるもよく、問題あるもよく、問題なきもよく、順境もよく、逆境もよきは、ただ生命のあるものにとつてのことである。命あれば、寒気に堅くなり、陽気に太くなる。生命の流れたるものは、必ず、一切を我が上に受け取つて、その滋養とする。貴重なる滋養物も病人には時にかえつて毒となる。毒となるか

滋養となるかは、胃腸の強弱にあり。大法の領解者は、如来願力の回向によつて、智慧の命を恵まれたものである。慧命のあるところ、ただちに久遠の法身と一体である。南無阿弥陀仏がそれである。

学仏大悲心。仏道の正因は平等の大慈悲である。平等心こそはまことにこれ「仏教の通軌」である。彼の聖道門にあつては、初地已上にしてはじめてこの平等心を獲ると言われる。しかるに我ら信外の軽毛、ただ愛憎に囚われて、差別顛倒の声のみによつて六道を輪廻したのである。しかるに我ら、有難き哉。思いがけなく平等大悲の教命を聞く。この平等大悲の声、法界に響いて、仏道の正因となりたもう。浄土の教えを聞くものは、知らず知らず、仏のそばに随うものである。故に、信心決定して報恩謝徳の念仏行に生きるものは、常行大悲の人と言われる。されば聞其名号信心歡喜することを学仏大悲心と言われる。されば、念仏の人のみ、言々句々の眞実教の言が、そのまま如来の血にてましますことを知るのである。

希くば、我をして、立つも座るも、出るも入るも、語るも黙するも、時処諸縁を問わず、行住坐臥すべて、大悲によつて終始せしめたまえ。これ我が如来によつて与えられたる唯一の願である。念仏すれば、足らざるものなきに、邪悪なるもののみのが心に見えることではある。行きかう雲の如くに。